平成２６年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	小中高の学校種を架橋する体育教師教育における専門的力量の形成に関する研究

研究代表者

氏名	所属	職名
鈴木直樹	芸術・スポーツ科学系	准教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

日本では，小学校教諭，中学校教諭（保健体育），高等学校教諭（保健体育）といったように同じ体育を指導する教員でも必要とされる免許が異なっている。すなわち，その専門的力量について，大きな教科としての枠組みからの考察のみならず，発達段階を視野にいれた考察が必要不可欠ともいえる。「教師は子どもの存在によって体育教師となる」（鈴木，2003）という指摘もあるように，児童生徒という存在との関係の中で教師は指導者として存在し，認識される。そこで，教育における社会的責任が問われる中，教師の養成，現職の研修を考えて行く上でも，児童生徒の発達段階に応じた学校種別の教師の専門的力量を明らかにする必要があり，かつ教師の存在を浮き彫りにする児童生徒という存在の中での成長の方向性を明らかにしていく必要がある。このようなことを背景として，本研究では，小学校，中学校，高校という学校種間を架橋する教師の専門的力量について検討し，初等中等教育における教師教育のアイデンティティを生成し，教師教育の基礎的知見を見出すことを目的としている。

専門的力量を検討する枠組みとして,CK(Content Knowledge：内容知識),PK(Pedagogical Knowledge：教授学的知識)から小中高等学校の教員の差異を質問紙調査により検討した。その結果,小学校教員は中高教員に比べ,CK と PK 共に不足していると認識していることが明らかとなった。また,実際の CK に対する知識については,中高の教員の方が高い一方で,PK に関する知識には大きな差異がないことも明らかになった。

また,小学校と中学校で体育のアクションリサーチを実施した。その結果,内容知識が不足していると認識している小学校教師は,他者の意見を受け入れやすく,協働しながら授業を作り上げていく様子が見られた一方で,内容知識が高いと認識する傾向にある中学校教師では,授業観の変容に時間がかかり,協働するまでに時間がかかることが明らかになった。このように同僚性という観点から見ると,中学校教師の方が「自分の考え」を保留して協働することが難しく,それは,「高い専門性を有している」という認識が妨げる要因となっていることが見出された。

さらに,小学校の教師と高等学校の教師に対して,それぞれの成長に対するライフヒストリー・インタビューを実施した。その内容を,成長の転換期における「重要な他者の存在」という視点で読み解くと,小学校教師は「学校内における問題解決を共有している尊敬できる身近な存在」との出会いを見出すことができた。一方で,高校教師は,「学校外の自分の常識を打ち破る異質な他者」との出会いを見出すことができた。このような事実からは,教科担任制である小学校教師は学校内で協働しあう仲間を得て高め合う関係を作り出すことができるのに対して,高校教師は,学校外で協働しあう仲間を得ていかなければならないことを示している。しかしながら,高校教師の学校外での出会いは,教科での関わりというよりは,運動部活動での関わりが強く,体育教師としての研鑽の場を生み出しにくいことを示しており,中高教員の教師力養成の研修を考えていかなければならないことを示唆している。

以上,本年度の研究では,小学校教師と中高教師の間の専門的知識の違いを明らかにし,それに対する認識とそれによって生まれている同僚性の問題を明らかにすることができた。また,教師の同僚性を発揮しながらの成長の違いについて明らかにすることができ,これは今後,学校種によって教員研修を考えていく必要性の示唆とそれに対する重要な知見となり得ると考える。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

１）体育教師の専門的知識の学校種間比較,鈴木直樹,日本体育学会（発表予定,2015年８月）
２）教師の成長における転機－学校種の違いに着目して－,鈴木直樹,東京学芸大学研究紀要（執筆中）